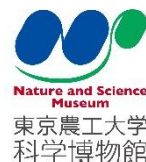


科学博物館ニュース速報



Vol.64 2025/10/03

館長よりメッセージ

➤ 科学博物館長・工学研究院教授 中澤 靖元

本年11月4日（火）より、当館では企画展「シルクが切り開く未来展」を開催いたします。

シルクは古くから衣料や工芸の素材として人々の生活に深く根付いてきましたが、その役割は決して伝統にとどまるものではありません。現代の科学技術の発展により、シルクは医療・環境・食といった未来社会の課題に挑む“新しい素材”へと姿を変えつつあります。本展では、こうした研究の最前線を、実際のサンプルや展示パネルを通して幅広い世代の皆さまにご紹介いたします。

たとえば再生医療の分野では、人工血管や心臓弁、人工皮膚といった医療材料としての応用が進められています。また、土壌や海洋で分解可能な特性を活かして環境循環型素材としての展開が期待され、さらには培養肉の「細胞足場」として活用されるなど、持続可能な食の未来にも貢献し得る存在となっています。まさに「伝統素材」から「未来素材」へ、シルクの可能性は大きく広がっているのです。

なお本企画展は、サンライズ財団のご後援を賜り、また本学が取り組む 生研支援センター・オープンイノベーション研究・実用化推進事業および、東京農工大学 融合研究支援制度（TAMAGO）の成果を基盤として実現しました。多くの方々からのご支援によって、研究成果が社会に開かれ、博物館を通じて皆さまに届けられることを心より感謝申し上げます。

今回の展示は、研究者のみならず、一般の方々や学生の皆さんにも、新しい学びや発見の機会を提供することを目指しています。特に若い世代にとっては、身近な「絹糸」が最先端科学とつながっていると知ること、科学への興味や未来への視野を広げる貴重な経験になると考えております。

本展を通じて、シルクから描かれる新たな未来像を多くの方々と共に有できれば幸いです。ぜひご家族やご友人とともにご来館いただき、シルクが切り開く未来を実感していただければと思います。皆さまのご来館を心よりお待ちしております。



目次

- ・館長よりメッセージ／中澤靖元……………P.1
- ・副館長よりメッセージ／伊藤克彦……………P.2
- ・文化庁「NEW!!SEUM」報告／齊藤有里加…P.2
- ・大学博物館等協議会（九州大学）発表報告…P.3
- ・博物館サマーフェスタ開催報告……………P.4
- ・「タイガー計算機展ニ！」開催報告／上田裕喜…P.6
- ・ディープテック産業開発機構「フロンティア研究環」展示について／長澤和夫機構長……………P.6
- ・musset 見学報告（理科ハウス、国立科学博物館産業技術史資料情報センター）……………P.7
- ・繊維の雑学あれこれ／繊維技術研究会……………P.8
- ・収蔵資料活用報告……………P.8
- ・事務室から……………P.8

2025年度 企画展

シルクが切り開く未来展

The Future of Silk Materials



2025年 11月4日（火）～2026年6月27日（土）
東京農工大学科学博物館 1F 企画展示室（小金井キャンパス）

開館時間：10:00～17:00（入館は16:00まで）

休館日：日曜日・月曜日・祝日・5月31日（創立記念日）
臨時休館日：2025年11月29日（土）・12月26日（木）～2026年1月3日（土）
1月23日（金）～1月24日（土）・2月24日（火）～2月25日（水）・3月11日（水）～3月12日（木）

臨時開館日：2025年11月9日・2026年2月1日・5月24日（日）

博物館ホームページ：<https://www.tuat-museum.org/>
X（旧ツイッター）@tuat_kahaku で博物館情報発信中！

※開館イベントの詳細は博物館ホームページをご覧ください。
※開館日の展示資料の入替えを予定しております。
※本展覧の一環は、東京農工大学融合研究支援制度「TAMAGO」および、生研支援センター「オープンイノベーション研究・実用化推進事業」により実施されています。

主催：東京農工大学科学博物館 シルクが切り開く未来展実行委員会
協力：九州大学大学院工学部繊維学専攻繊維分子科学分野
国立研究開発法人生物資源総合研究所
東京農工大学科学博物館展示学支援 musset
東京農工大学大学院工学部生命工学専攻 中澤・野口研究室
東京農工大学大学院工学部生命工学専攻 中澤・野口研究室
群馬県立総合技術センター
日本絹織物協会

後援：一般社団法人 絹織物学会
一般社団法人 シンフォニック
一般社団法人 日本絹織物協会

副館長よりメッセージ

➤ 科学博物館副館長・農学研究院准教授 伊藤 克彦

私は現在、神奈川県相模原市に住んでいます。相模原市および近隣の地域は、かつて養蚕がとても盛んでした。そのため、蚕の神様を祀る神社がたくさんあります。私は、このような神社を巡るのが大好きで、妻と車で探索しています。この副館長からのメッセージでは、私がこれまでに訪れた神社について紹介していきたいと思っています。

私は前号のメッセージの中で、「自宅近くの蚕の神社にて」という写真を掲載しました。その答えを本号では発表します。あの写真は、相模原市のお隣の座間市にある「座間神社」で撮影したものになります。かつて座間で流行した疫病が、森の中に湧く清水「御神水」によっておさまったとの言い伝えがあり、それを祀ったのが座間神社のはじまりと云われています。この御神水は、今も神社の近くから湧き出しています。この座間神社の中に、「伊奴寝子（いぬねこ）社・蚕神社」があります。畜産や養蚕が盛んだった頃から、家畜や蚕を病気から守るための神社として祀られていたようです。私のお目当ての蚕神社は鳥居の奥にあります（写真）。歴史を感じる佇まいに、私は、この地域において養蚕がいかに重要な産業であり、そのためカイコの無病を願う養蚕信仰が盛んだったのだと改めて感じました。ちなみにこの神社には猫と犬の石像があり、現在は大切なペットを守るための社となっています。

座間神社には他にも多くの見どころがあります。また神社は少し高台にあり、風がたくさん入り込むので、境内を散策しているととても気持ち良かったです。皆さんもお近くに来られた際は、是非、ご参拝されてみてはいかがでしょうか。

最後に、今回の写真の掲載にあたっては、座間神社の宮司である山本俊昭様にご許可をいただきました。この場をお借りして、お礼申し上げます。



座間神社境内にたたずむ蚕神社

文化庁「NEW!!SEUM」に紹介されました

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 齊藤 有里加

この度、東京農工大学科学博物館が文化庁の博物館総合ウェブサイト「NEW!!SEUM」において紹介されました。

ウェブサイト：<https://museum.bunka.go.jp/newseum/>

youtube：<https://www.youtube.com/watch?v=mi00NbcUx4s&t=46s>



今回注目されたのは、当館のモノ資料そのものではなく、「人」です。当館には、3つの自立した支援組織が活動しており、博物館とかわりながら独自の取り組みを続けています。こうした形態は全国的にも珍しく、大きな特色となっています。

繊維技術研究会：元エンジニアが中心となり、実際に繊維機械を動かして技術を伝承。

博物館友の会：学びの成果を作品展として発表し、技術を世代間で受け継ぐ活動を展開。

musset：学生が主体となってガイドや展示支援を行い、来館者と博物館をつなぐ役割を担う。

撮影にあたっては、それぞれの組織の皆様本当にありがとうございました。友の会作品展の様子や動態展示、さらには学生へのインタビューなどを、当日いきなりの依頼にもかかわらず快くご協力いただき、素晴らしいコメントを寄せていただきました。そのおかげで、人々が行き交う「当館らしい雰囲気」を発信することができたと感じています。一方で私は、暗い中でスポット照明を浴びながら緊張して撮影に臨み、少し恥ずかしかったです。貴重な体験でした。

それぞれの活動が担う動態展示や手仕事の技、サイエンスコミュニケーションなどは、収蔵庫に保存することのできない当館ならではの“もう一つの資産”でもあります。博物館法が更新され、新たな博物館を目指す時代にあっては、このような新しい価値がますます求められていくのだと思います。今後も皆さんと一緒に博物館を盛り上げていけたらと思います。ぜひ多くの方に、当館の取り組みをご覧いただきたいと考えています。

大学博物館等協議会・日本博物 科学会（九州大学）発表報告

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 齊藤 有里加

このたび、九州大学で開催された第20回日本博物科学会において「大学博物館がつなぐ蚕糸学150年の遺産—歴史資源の再評価と新たな教育的活用—」と題して発表を行いました。

発表では、東京農工大学科学博物館における蚕糸学資料の再評価と教育的活用の取り組みをご紹介します。蚕糸学はかつて日本の基幹輸出産業を支えた学問ですが、現在では独立した学科としては存在していません。当館では、繭や器具を用いた展示に加えて、製糸機械を実際に稼働させる「動態展示」を行い、技術の仕組みや思想を来館者に体験的に伝えております。

また、授業との連携や学生による科学コミュニケーション活動を通じて地域に開かれた教育拠点としても機能しており、女子蚕糸業教育に関する企画展や、最後の製糸教婦教員を招いた座談会、製糸場面面の3D化といった新しい取り組みも進めております。今後は全国の大学博物館と連携し、資料と人をつなぐネットワークを築くことで、消えかけた学問領域を再評価し、未来へ継承していきたいと結びました。

発表後、他館が所蔵する蚕糸関係の資料についての情報などを頂きました。蚕糸資料は当館だけでなく各地の大学博物館にも所蔵されています。それらの資料とも繋がりつつ、当館の資料をさらに発展していけたらと思います。



発表が終わり、
笑顔の齊藤学芸員
と伊藤副館長

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 上田 裕尋

2025年6月19日から20日にかけて、九州大学総合研究博物館にて第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会が開催されました。今回は私以外に齊藤学芸員と伊藤副館長の二名が参加されました。本会は二つの学会が毎年共同で開催している主に博物館関係者向けの学会です。大学博物館等協議会では博物館における収蔵庫問題についてのシンポジウムが開催されました。九州大学総合研究博物館

では以前より新たな博物館資料の収蔵スペースの確保や、大学キャンパスの移動に伴う大規模なリニューアルに伴う収蔵スペースの確保を進めており、これらを反映したシンポジウム内容となっておりました。九州大学以外にも東京大学と北海道大学から佐々木猛智先生と小林快次先生が発表され、それぞれの大学博物館での収蔵スペース確保の戦略やプロジェクトについて紹介されました。小林先生の発表は特にセンセーショナルなものとなっており、以下に大学内での博物館の位置づけを確固たるものにするかという戦略について、印象深い発表となっておりました。

日本博物科学会では、全国の科学系博物館や大学博物館での取り組みについて発表があり、当館からも私（上田）と齊藤学芸員の二名がそれぞれ発表を行いました。

私は昨年度に全国科学博物館協議会及びカメイ社会教育振興財団の助成を受けて調査・渡航したアメリカ合衆国イェール大学附属ピーボディ博物館でのリニューアルについて、資料の扱いや学内利用促進の工夫について発表してきました。一方で、齊藤学芸員は当館の歴史や収蔵資料について網羅的に解説したうえで、それらの資料を用いた東京農工大学での教育普及活動、そして2024年度企画展「女子蚕糸業教育」展での蚕糸学資料の再評価と新たな教育利用について発表されました。

学会の最後には、九州大学総合研究博物館の見学ツアーもあり、九州大学が誇る資料について解説をうけました。歴史の長い九州大学ならではの資料が数多く存在し、今後のリニューアルでこれらの資料がどのように活用されていくのか大変楽しみになるものでした。今後も、本学会をはじめとする学会等に積極的に参加し、各地の博物館同士の情報交換や連携を進め行ければと考えております。



九州大学総合博物館（箱崎キャンパス）



上田学芸員の発表

博物館サマーフェスタ開催報告

➤ 博物館友の会 ひも結びサークル 布村 典子

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 齊藤 有里加

8月23日(土)に開催された「科学博物館サマーフェスタ」では178名の参加がありました。博物館学芸員実習生による展示イベント「結んでほいてひもといて」のほか、博物館支援学生団体 musset によるサイエンスマルシェ、繊維技術研究会による動態展示、そして博物館友の会によるワークショップ「ひもで遊ぼう」が加わり、それぞれのブースが大変盛り上がりしました。musset のブースではタイガー計算機の体験コーナーも設けられ、待ち時間にも来場者が楽しめる工夫が見られました。連日の猛暑の中でしたが、多くの方に夏休みのひとときを楽しんでいただけたことと思います。

特に学芸員実習企画「結んでほいてひもといて」では「結び」をテーマにしたサイエンスコミュニケーションを展開しました。事前学習として、学生たちは日本科学未来館の見学をしたほか、合田先生・畠中先生からは紐結び理論の数理的背景を、友の会の布村典子さんからは伝統的な「ひも結び」の実演とワークショップの講義を賜りました。企画を立てる上でこの機会は学生にとって貴重な体験となりました。

学生たちは伝統班・数理班・DNA班・実用班に分かれて、限られた時間数の中でテーマを掘り下げ、農工大らしい多角的な内容を来館者へ発信することができました。実験をしたり、素材に悩んだり、動画を作成したり、さまざまな工夫をすることで「結び」を効果的に見せることができたと思います。また、収蔵庫の古い結び資料を積極的に活用し、導入パネルとして取り入れたことで当館の歴史的な背景と今回の展示とをつなげるきっかけにもなりました。

ご来館いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。なお、以下に合田先生、畠中先生、布村様からいただいたコメントをご紹介します。

- 工学研究院 数理科学部門 教授 合田 洋
- 工学研究院 数理科学部門 講師 畠中 英里

今年度の博物館実習のテーマは「結び」で、数学の一分野である結び目理論を研究する教員としてサマーフェスタの企画に協力させていただきました。

6月には履修生と友の会の皆さまと集う場で「結びと数学」と題した講演を行いました。友の会の皆さまからは花結びなど伝統的な紐結びを教えていただき、日本文化の継承と世代を超えた温かな交流を経験しました。7月には「数理班」となった学生が研究室を訪れ、展示企画について議論しました。短期間で専門的な理論を理解する上、さらに一般向け展示を作成するのは大変だろうと案じましたが、実際に展示を拝見し、その完成度の高さに驚きました。トポロジーを解説するコマ撮りの映像や、結び目を手で動かして体感する工夫など、基礎的な展示に加え、蝶結びやネクタイ結び、あわじ結びを数学的に捉えて交点数や型を調べる専門的な取り組みまであり、子どもから大人まで楽しめる内容でした。

数学をより身近で、楽しいものとして普及してくださった今回の企画に大変感謝しています。

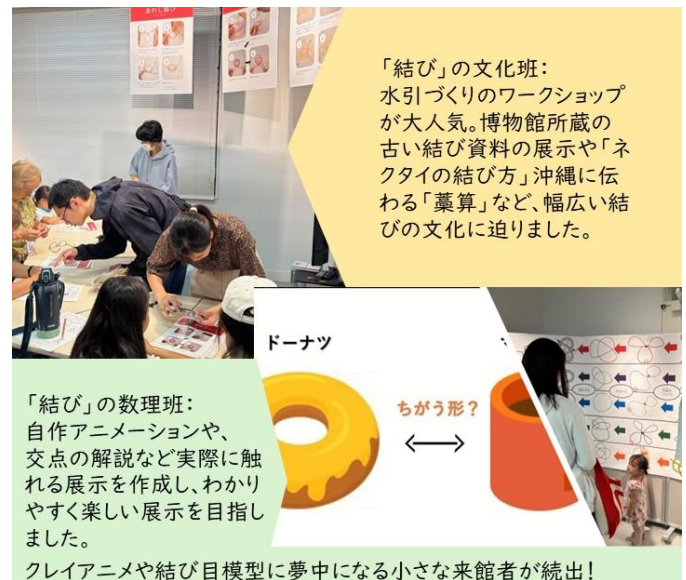
「結びの世界へようこそ」と迎えられたサマーフェスタ。

結びは、旧石器時代頃から人の営みのなかにあり、これは「人と火」との出会いと並んで人間の営みを大きく発展させたものと言われています。この「結び」のしぐみが、21世紀の今、数学、化学さらにDNA(生命の結び)と係わりを持つさまを、各ブースで学生さんの頭脳を借りて実体験できた喜びはことの他でした。

トポロジーのブースで、私はふと考えました。トポロジーの交差のない輪(O1)と、古くから使われていた物入袋の口紐の「輪の結び」に接点があるのでは?と。この口紐の結びは現代まで茶道、香道などの仕覆結びとして発展し伝承されてきています。

そして、農学部の子どもの牛の「頭絡」。日常的に使っている結びで「とっくり結び」とあわせて作業結びの大切さを知りました。

この度の出会いは、農工大科学博物館だからこそできたことと、齊藤先生、上田先生に感謝いたします。



サマーフェスタ 友の会ひも結び ワークショップ開催報告

➤ 友の会ひも結びサークル マネージャー 二階堂 貴子

博物館サマーフェスタ開催にあわせて、「ひもとあそぼう」というワークショップを友の会「ひも結びサークル」が行いました。猛暑の中、家族連れを始め、シニアの方、老若男女、大勢の方にご参加いただき、満員御礼で無事に終了いたしました。（作品を作られた方は45名。見学だけをされた方も、大勢いらっしゃいました。）

用意したチャームの素材は江戸打紐で、色は

- ・オレンジ
- ・水色
- ・キミドリ

で、好みではなく、均等にくじ引きで充てがわれたのですが、不思議なことに引き当てた人の洋服と同系色だったり、その人のパーソナルに似合う色に当たっていて、皆さん、身につけられると、とても良く似合っていました。

お子さんには少し難しく、根気のいる作業でしたが、完成すると達成感があり、喜びもひとしおだったと思います。

今回お教えした「タッチング結び」は、応用も広く出来ますので、ちょっと工夫して、お花の形や耳の付いた様な形にも出来たり、素材の違う紐を使って大人っぽいアレンジなども出来ます。

ご家族連れのお母さんには、「お家にある物でも出来ますよ!」とアドバイスをしたので、ぜひ、またお家でも紐結び作品作りに挑戦して欲しいと思います。



サマーフェスタ musset ワークショップ報告

➤ musset 工学部生命工学科2年 前山 明香

2025年8月23日(土)に東京農工大学科学博物館にて開催されたイベント「サマーフェスタ」内で、東京農工大学科学博物館支援学生団体mussetは、歯車の仕組みをテーマにしたワークショップ「回して学ぶ! 身近にある歯車のひみつ」を出展しました。



今回は、大きさの異なる歯車を組み合わせることで、伝わるスピードと、ものを回す強さ(トルク)が変化することを、平歯車を回したりモーターカーを走らせたりといった実験を通して学びました。大・中・小のサイズの平歯車を組み合わせ、実際に自分たちの手で回すことで、子どもたちには歯車の回転数が変わることを楽しみながら理解していただけたかと思います。

また、大正から昭和にかけて広く用いられた手回し式計算器であるタイガー計算器を展示し、mussetが制作した計算問題を使って、来場者の方々に計算体験をしていただけました。今後も musset は、科学の知識を楽しく学べるようなイベントを発信していきます。



ミニ企画展「タイガー計算キ展 ミニ！」開催報告

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 上田 裕尋

2025年8月5日（火）より、東京農工大学府中キャンパス本館2階農学部展示室（科学博物館分館）にて分館ミニ展示「タイガー計算キ展ミニ！」が開催されています。本展示は2023年度に開催された企画展「タイガー計算キ展」から一部の展示を選抜したものになっています。

「タイガー計算キ展」では、工学部知能情報システム工学科が保管してきた西村コンピュータコレクションに含まれている200台近いタイガー計算器について、タイガー計算器とはどのような機械なのか？農工大はなぜそんなにもたくさんのタイガー計算器を集めていたのか？について紹介するものとなっていました。「タイガー計算キ展ミニ！」でもタイガー計算器とは？そして西村コンピュータコレクションとは？という点にフォーカスした展示となっております。3台の実物のタイガー計算器も展示しております。

今回のミニ展示では、実際にタイガー計算器を動かすことができるハンズオン展示は開催することができませんでしたが、今後も博物館ではタイガー計算器を活用したイベントや展示を計画しておりますので、ご期待ください。本ミニ展示は10月24日（金）までの開催となります。今では目にすることが無くなってしまった機械式計算器に、皆様が親しむ貴重な機会になれば幸いです。



ケース内展示の様子。部品の名称を細かく記載し、機構をわかりやすく解説しました



ディープテック産業開発機構 「フロンティア研究環」展示について

➤ ディープテック産業開発機構 機構長 長澤 和夫

ディープテック産業開発機構では、異なる分野の融合による新たな学術領域の創出と、産業構造の変革を目指した挑戦的な研究を推進しています。

このたび科学博物館のご協力のもと、2025年8月5日から9月27日まで、フロンティア研究環を構成する研究拠点の研究紹介ポスターを展示しました。

展示では、ヒューマン・マシンインテリジェンス研究拠点（拠点長：近藤敏之 工学研究院教授）、カーボンネガティブの限界に挑戦する炭素耕作拠点（拠点長：養王田正文 工学府特任教授）、スマートモビリティ研究拠点（拠点長：ポンサートン 工学研究院教授）、圃場型ディープテック研究拠点（拠点長：大川泰一郎 農学研究院教授）、ワンヘルス感染制御研究拠点（拠点長：水谷哲也 農学部附属感染症未来疫学研究センター教授）、といった多様な分野の研究拠点が紹介され、皆様に学内の最先端の取り組みをわかりやすくご覧いただきました。

今回の展示をきっかけに、フロンティア研究環の各研究拠点による挑戦的な研究活動に注目いただけると幸いです。

東京農工大学 ディープテック産業開発機構

<https://sp.deeptech.tuat.ac.jp/>

同 フロンティア研究環

<https://sp.deeptech.tuat.ac.jp/frontier/>



本学の先端研究について、来館者の皆様に広く知っていただくことができました



展示スペース
全景

musset 見学報告

理科ハウス見学

➤ musset 工学部生命工学科3年 塩澤 真奈

理科ハウスは神奈川県逗子市にある「世界一小さな科学館」で、体験型展示で理科を学べる場所です。当館で昨年度開催した「小さいとこサミット」での交流をきっかけに、優れたサイエンスコミュニケーション技術を学んで musset 独自の企画に活かそうと今回の見学が実現しました。

館内は天井にモーメントを示すやかんが吊り下げられ、壁の元素周期表をはじめ、科学を身近に体験できる工夫にあふれていました。展示物は体験の入口として、触れる・試す・考えることが重視されていました。

特に印象的だったのは、博物館を運営されている森さんと山浦さんが来館者の様子を見て声をかけ、温かい雰囲気を作ってくれたことです。そのおかげで自然と疑問を口にしやすくなり、双方向の会話が弾み、サイエンスコミュニケーションの実践を体感できました。気づけば4時間以上滞在し、科学の楽しさに引き込まれていました。

今回学んだ双方向的な展示や対話の姿勢を、musset の今後の活動に取り入れていきたいと考えています。

理科ハウス【世界一小さな科学館】

<http://licohouse.com/>



国立科学博物館産業技術史資料情報センター見学

➤ musset 工学部応用化学科2年 中村 拓夢

2025年8月9日、国立科学博物館の収蔵庫見学を実施しました。普段よく訪れる上野の国立科学博物館ではなく、今回は初めて訪れるつくばの産業技術史資料情報センターを見学しました。

今回の見学の目的は、サマーフェスタで musset が企画した科学教室のテーマが「機構」であったため、科博が所蔵する機構に関する資料を参考にし、企画に役立てることでした。

収蔵庫内の機構資料の多さは、100年を超える科博の歴史が感じられ、圧倒されました。また、資料のメンテナンスについてのお話を伺うことができ、大変興味深かったです。

さらに、機構以外にも理工学系の多様な資料を見せていただきました。カメラやコンピュータなど、日本の技術者たちの努力の結晶ともいえる資料を見学させていただき、非常に感慨深い体験となりました。

国立科学博物館 産業技術史資料情報センター

<https://sts.kahaku.go.jp/>



実物の収蔵資料に触れて機構を確認します。貴重な体験！



繊維の雑学あれこれ

➤ 繊維技術研究会 石澤 砂月

前号に引き続き、繊維にまつわるあれこれを雑学のご紹介します。

【その2】系の太さはどう表すの？

繊維業界、新人泣かせの系の太さの表し方をご紹介します。

1991年、SI単位で「1,000mあたり1gを1テックスとして全ての繊維を統一して表記する！」とtex(テックス)を決定しましたが、現在、系の購入時に、この表示はほとんど見かけず、現場での普及はされていないようです。

そもそも系の太さの表記は大別して、「恒重式番手(こうじゅうしきばんて)」と「恒長式番手(こうちょうしきばんて)」の2種類があります。

【恒重式番手(こうじゅうしきばんて)】

原材料の基準の重さから作られた系の長さによって決まる。

※番手の数字が大きくなるほど系は細くなる。

コットンの番手…1ポンド(453.6g)あたり840ヤード(約768.1m)のとき1番手

ウールの番手…1kgあたり1,000mで1番手

麻系の番手…1ポンド(453.6g)あたり300ヤード(約274.3m)のとき1番手

(基準の重さや長さが違い、どうにか統一してほしい感じです)

【恒長式番手(こうちょうしきばんて)】

基準の長さに対して重さが変わると番手が変わり、化学繊維などの表記に使われます。

デニール…9,000mあたり1gのとき1デニール

テックス…1,000mあたり1gのとき1tex、10,000mあたり1gのとき1dtex

※恒長式番手では番手の数字が大きくなるほど系は太くなっています。

その他、絹系の太さの表現には「21中(にじゅういちなか)」と言うものもあります。

「中(なか)」というのは、ざっくり言うとデニールと同じで、「デニールの平均値」という意味で使われ、21中は、だいたい21デニールの生糸のことを指します。

統一してくれるのが一番なのですが、同じ太さの別素材を求める場合、ネット上にはいろいろな番手計算のHPがありますのでご利用ください。

参考資料：繊維一言メモ(繊維技術研究会・五味 宏)



ラミー系 40/2
(写真左) と
綿系 40/2 (右)

収蔵資料活用・取材報告

1. 資料貸出1件

(1) 雑誌「通販生活」9・10月号「日本における猫の歴史」
「蚤やしない草 三枚綴」画像データ貸与

2. 取材及び掲載1件

(1) EIC ネット「エコナビ」当館ミュージアムグッズ
紹介記事掲載

◇事務室から◇

今年の夏も少雨酷暑となりました。4年目のワタたちは暑さに耐えて今年も花を咲かせ、少しずつ実をはじけさせています。mussetの学生たちがこまめに水やり・草取りを行ってくれて、昨年よりもよく伸び、花のつきも良いようです。無事にたくさんワタが採れることを願っています。



mussetがワタの
採集を行って
くれています。
今年も楽しみ
です！

また、毎年恒例の公開講座「子供科学教室」(7月26日「環境中のマイクロプラスチックを調べよう」・8月2日「骨から読み解く動物が生きるしくみ」)ともに今年度も大人気でした。内容について、詳細は本学ウェブサイト「NEWS」欄をご覧ください。

「環境中のマイクロプラスチックを調べよう」

https://www.tuat.ac.jp/NEWS/event/20240926_01.html

「骨から読み解く動物が生きるしくみ」

https://www.tuat.ac.jp/NEWS/event/20250818_01.html

11月4日より開催の企画展「シルクが切り開く未来展」でも様々なイベントを予定しています。秋の博物館もぜひお楽しみください！

「科学博物館ニュース速報」第64号

発行日：2025年10月3日

編集：科学博物館ニュース速報編集委員会

発行：東京農工大学科学博物館

連絡先：kahaku@cc.tuat.ac.jp

042-388-7163